

Title	オーストラリアにおける歴史戦争後の歴史博物館 : クィーンズランド州における調査から
Author(s)	藤川, 隆男
Citation	パブリック・ヒストリー. 2013, 10, p. 15-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66512
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

オーストラリアにおける歴史戦争後の歴史博物館

クィーンズランド州における調査から

藤川隆男

1 背景

本稿の目的は、2010年から2011年にかけて行った、オーストラリアのクィーンズランド州における、歴史博物館の調査の結果と、その調査の背景を説明することである。

1994年、アメリカ合衆国において、スミソニアン博物館によるエノラ・ゲイなどの原爆投下に関わる特別展をめぐる⁽¹⁾、激しい論争が起こった。その展示に強く抗議し、展示内容を大幅に修正させたのが、歴史家であり、1995年にアメリカ議会の下院議長となったニュート・ギングリッチである。彼といわゆるネオコンと呼ばれる人びとは、黒人史、少数民族の歴史、女性史などを取り入れた多文化主義的な歴史観を激しく攻撃し、「歴史戦争」と呼ばれる文化戦争が、博物館の展示や歴史教育などをめぐって展開されることになった。

オーストラリアでも同様に、1990年代からナショナル・アイデンティティの問題を軸に、多文化主義政策や共和制への移行をめぐる、労働党のキーティング党首と自由党のハワード党首が激しく対立した⁽²⁾。この対立はマニング・クラークとジェフリー・ブレインニーというオーストラリアを代表する歴史家の歴史観の対立として現出し、「歴史戦争」と呼ばれて、マスコミや研究者の耳目を集めた。日本においては、筆者も加わった2004年のオーストラリア学会

(1) 歴史戦争の描写に関しては、Macintyre, Stuart and Anna Clark, *The History Wars*, Revised edition. Carlton, Victoria: Melbourne University Press, 2004, p. 9 以下の叙述や、藤川隆男「歴史戦争を通してみたオーストラリアのナショナル・ヒストリー—アイデンティティをめぐる歴史的争いとヒストリオグラフィーについて」『オーストラリア研究』17号、2005年、5-10頁、Clark, Anna, *Teaching the Nation: Politics and Pedagogy in Australian History*, Melbourne: Melbourne University Press, 2006, pp. 8-9, pp. 63-70; Id., *History's Children: History Wars in the Classroom*, Sydney: University of NSW Press, 2008などを下敷きしている。

(2) オーストラリアにおける歴史戦争の詳しい内容に関しては、注1の文献に加えて Windschuttle, Keith, *The Killing of History: How a Discipline is being Murdered by Literary Critics and Social Theorists*, Paddington, NSW: Macleay Press, 1994; Id., *The Fabrication of Aboriginal History, Volume One: Van Diemen's Land 1803-1847*, Paddington, NSW: Macleay Press, 2002 及び Manne, Robert (ed.), *Whitewash: On Keith Windschuttle's Fabrication of Aboriginal History*, Melbourne: Black Inc., 2003; Macintyre, Stuart, Who plays Stalin in our History Wars?, *The Sydney Morning Herald*: 17/Sept/2003, smh.com.au, The Sydney Morning Herald (Internet, 5 July 2012, <http://www.smh.com.au/articles/2003/09/16/1063625030438.html>); Irving, Helen and et al, Footnotes to a war, *The Sydney Morning Herald*: 13/Dec/2003, smh.com.au, The Sydney Morning Herald (Internet, 4 July 2012, <http://www.smh.com.au/articles/2003/12/15/1071336875054.html>)などを参照。

のシンポジウムで、主要なテーマとして取り上げられている。歴史戦争では、一方で多文化主義や先住民の歴史がブレインニーによって「喪章史観」と批判され、他方でブレインニーらの見解が過去の人種主義への先祖がえりに等しいとの嫌疑をかけられた。

1996年のハワード自由党連立政権の登場によって、保守的な勢力の攻撃としての歴史戦争が本格化する。ハワード政権は、経済面ではグローバリズムを唱え、経済合理主義（新自由主義のオーストラリア的表現）の徹底をはかったが、社会政策の面ではきわめて保守的な政策を採用した。ハワードは、オーストラリアの共和国化に反対し、先住民（アボリジナル）政策・多文化主義政策の転換をはかった。このような転換は文化の面にも及び、ハワードに深くかわりのある知識人やジャーナリストを中心に、先住民の権利の拡大や多文化主義を支えた、歴史学や歴史研究への攻撃が始まった。

歴史戦争が最も先鋭化して現れたのが先住民問題である。先住民の土地権原を認めたマボウ判決とウィック判決が、ヘンリー・レイノルズらによる歴史研究に大きく依拠していたのに対し、ブレインニーやハワードは、「喪章史観」を背景とするこうした研究の正当性に疑問を投げかけた。2人が傑作として激賞した歴史研究が、ウインドシャトルによる『アボリジナルの歴史の創作』である。ウインドシャトルは、タスマニアにおけるアボリジナルの虐殺が歴史家たちの意図的な創作、虚構であると主張し、主要な新聞や雑誌を巻き込んだ大きな論争を引き起こした。⁽³⁾ オーストラリア唯一の全国紙『オーストラリアン』に、ウインドシャトルの本に関して1年間に40本もの記事が掲載されていることを見ても、この論争の広がりが理解できる。他方でハワードは、国立博物館やABCなどの役員を右翼的な見解を持つ人物に入れ替えた。キャンベラの国立博物館を成功裏に立ち上げたにもかかわらず、職を去らねばならなかった先住民の館長ドーン・ケイシーは、この争いの犠牲者である。

ところが、多文化主義をめぐる論争が下火となり、共和制への移行の可能性が小さくなるとともに、保守陣営においても、労働党の側でも、歴史戦争への関心がじょじょに失われた。しかし、これでオーストラリアにおけるナショナル・アイデンティティの問題が解消したわけではなかった。

歴史戦争に強い利害関係を持ち、当事者でもあったオーストラリアの歴史家の多くも、労働党のラッド前首相による歴史戦争の終結宣言とともに、今ではこうした問題への関心を失った。⁽⁴⁾ しかし、歴史戦争の背後には、それを生み出す原因となった、歴史をめぐるもっと大きな構造的な変化があったように思われる。本稿は、そうした構造変化を明らかにしようとする試みの第1歩である。

(3) 注2のWindschuttle, 2002を参照。レイノルズの研究としては、1987年に初版が出た *The Law of the Land* を参照。その後、数度改訂版が出版されている。

(4) ラッドの演説は、Grattan, Michelle, Rudd urges end to history wars, *The Sydney Morning Herald*: 28/Aug/2009. theage.com.au, The Age (Internet, 4 July 2012, <http://www.theage.com.au/national/rudd-urges-end-to-history-wars-20090827-fi75.html>) を参照。歴史戦争の継続に強くこだわっているのは、ウインドシャトルとレイノルズやマリリン・レイクなどの左右両極に位置する歴史家である。

グローバリゼーションが進行すると、国民国家への帰属意識が弱まり、多元的なアイデンティティが強まるとの主張があるが、ここ 20 年間のオーストラリアでは、必ずしもそういう状況は見られない。この 20 年は、ナショナリズムの再編と強化の時代であった。塩原良和（『変革する多文化主義へ』法政大学出版局、2010 年）は多文化主義に関して、津田博司（「オーストラリアにおけるアンザック神話の形成」『西洋史学』220 号、2005 年）は戦争の記憶に関して、そうした状況を描き出している。ナショナリズムの興隆と歴史の重要性の高まりは、一般に相互補完的であり、それが筆者の主張する「歴史の社会化」をもたらしたとしても不思議ではない。したがって、こうした背景説明自体は陳腐だと思われるかもしれない。しかし、19 世紀的な歴史と国民国家の親密な共生関係とは異なり、多文化主義を経験し、グローバリゼーションを受け入れざるをえないオーストラリアにおいては、国家が歴史を利用し、国民国家の統合理念としてのナショナリズムを単純に賛美しているわけではない。筆者は、こうした 21 世紀の複雑な状況を「歴史の社会化」という言葉で表現し、その背景を分析したいと考えている。

2 歴史の社会化

筆者の主張する、歴史の社会化の内容をまず説明しておきたい。それは以下に示す 5 項目に
だいたい要約できる。

I 歴史の個人化・分節化

近年のオーストラリアでは、個人が自分の家族の歴史を研究するという意味での家族史が大流行している⁽⁵⁾。それにともなって、国立図書館や古文書館の主な機能は、プロの歴史家が研究を生み出すのを補助することではなく、アマチュアの家族史家に便宜をはかることに変化している。国家は、統合主義的なナショナル・ヒストリーの創造ではなく、世界に拡散する家族の、個別的歴史の拡大再生産に協力している。また、国立・州立図書館が進めるパンドラ (PANDRA) 計画のおかげで、普通の個人でも、デジタル化された大量の歴史文書を家庭で利用できるようになった。歴史をめぐる政府と個人の関係は大きく変化しているのである。また、国家よりも個別のエスニック・グループや特定の集団に歴史的アイデンティティを求める傾向も強くなっている。1990 年代以降、一部のエスニシティや先住民を対象とする、博物館や記念碑などが

(5) オーストラリアの家族史については、以下の文献を参照、Davison, Graeme, *The Use and Abuse of Australian History*, Crows Nest: Allen & Unwin, 2000; Nash, Catherine, “Genealogical identities”, *Environment and Planning D: Society and Space* Vol.20, 2002, pp. 27-52; Lambert, R.D., “The family historian and temporal orientation toward the ancestral past”, *Time & Society* Vol.5, 1996, pp. 115-143; Id., “Reclaiming the ancestral past: narrative, rhetoric and the ‘convict stain’”, *Journal of Sociology* Vol.38(2), 2002, pp. 111-127; Id., “Constructing symbolic ancestry: Befriending time, confronting death”, *OMEGA—Journal of Death and Dying* Vol.46(4), 2002-2003, pp. 303-321; Id., “Descriptive, narrative, and experiential pathways to symbolic ancestors”, *Mortality* Vol.11(4), 2006, pp. 317-335; Tranter, Bruce and Jed Donoghue, “Convict ancestry: a neglected aspect of Australian identity”, *Nations and Nationalism* Vol.9(4), 2003, pp. 555-577; Id., “Colonial and post-colonial aspects of Australia identity”, *The British Journal of Sociology* Vol.58(2), 2007, pp. 165-183.

急増するのは、その証左である。

II 地域の歴史化

オーストラリアの町は、従来歴史的過去にまったく無関心であったが、近年多くの町が「歴史の町 (historic town)」に生まれ変わった。歴史的標識が整備され、歴史的建造物が明示されるようになってきた。また、周りに牧場以外に何も無いような町に、歴史博物館が建造され、多数の来館者が訪れる事例も増えている。歴史は、地域経済の活性化の手段として広く利用されるようになったのだが、その背景には、多くの人びとが歴史に関心を抱くようになったという事情がある。歴史への関心の高まりが、歴史の町や歴史博物館を陸続と誕生させている。

III 歴史の商業化

歴史と経済的利益の関連が最も明白に見える場所に、スポーツや文化の領域がある。たとえば、AFL (オーストラリア・フットボール・リーグ) は、戦死者を追悼する記念日にアンザック・フットボールという名前の試合を開催したり、競技が先住民の伝統に由来するという疑わしい歴史をもとにマングルック杯を創設したりしている。いずれも商業的には大成功を収め、歴史物語の経済的な有効性を証明した。⁽⁶⁾ こうした例は、復活した聖パトリックの日の記念パレード (アイルランドのカトリックの聖人を記念する行事) にも見られる。

IV 歴史教育の再編とグローバリズムへの対応

歴史戦争の結末は、中等教育におけるオーストラリア史の必修化に向かった。これには、2大政党の労働党も自由党も合意している。オーストラリアにおいては、労働党のボブ・カー (2005年のシドニー国際歴史家会議でホストを務める) 政権が歴史を必修科目としたニューサウスウェールズ州を除けば、近年にいたるまで、歴史は、単独の必修科目として、初等教育のレベルでも中等レベルでも、教えられることはなかった。つまり、多くの子どもがほとんど歴史的知識を持たずに、教育課程を修了していた。歴史の必修化は、一見すると、単純なナショナリズムと国民史の共生関係のように見える。しかし、その内実は、単なるオーストラリアのナショナル・ヒストリーの必修化ではなく、グローバル・ヒストリーの一部としてのナショナル・ヒストリーの構築に進んだ。現在のオーストラリア政府には、国民国家の統合を単純に祝うような歴史を進める意図はないのである。⁽⁷⁾

V 情報の普遍化と歴史のメディア化

IT技術の進歩によって、大量の情報を蓄積し、また、政府の援助によって、それを広範に利用することが可能になった。その結果、一般の個人が、独自のアイデンティティを、専門的な歴史家の媒介なし、直接史料に基づいて構築できるようになった。また、ある論者によれば、公的記憶のメディア化という現象も起こっている。博物館や図書館は、歴史的展示の内容を、

(6) 藤川隆男他「『アボリジナルの近代スポーツ史—19~20世紀のオーストラリア』をめぐって (スポーツ史学会第22回大会シンポジウム再録)』『スポーツ史研究』23号、2003年、55-82頁を参照。

(7) この問題については、筆者は「歴史戦争の後に—オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的導入」という論文を脱稿し、国立民族学博物館の「オーストラリア多文化主義の過去・現在・未来—共生から競争へ」という研究会の最終報告書に掲載される予定になっている。

双方向的なメディアを利用して、一般社会のメンバーと共同で作るといった現象が見られるようになってきている。⁽⁸⁾ 公的な歴史の内容が、名もなき人びとの経験や意見を取り込むようになってきたのである。

オーストラリアにおける、これまでの歴史は、ナショナル・ヒストリー（ブリティッシュ・オーストラリアの歴史）を中核として、プロの歴史家と歴史学がそれを担うという形で実践されてきた。多くの政治家や国民は、こうした歴史を必要に応じて利用してきたのである。ところが、女性史やエスニック・ヒストリーの登場によって、ナショナル・ヒストリーの地位が大きく揺らぎ、家族史の流行によって、歴史研究の担い手に多数のアマチュアが加わった。また、地方自治体は、プロの歴史家が十分に関与しないなかで、独自の地域的アイデンティティを、歴史を通じて表明するようになった。さらに、スポーツ組織に代表されるような経済的な団体も、独自の解釈で歴史的意義を強調するようになった。歴史は、歴史のプロが生み出すものから、広く社会によって生み出されるものへと変わってきたのである。これが歴史の社会化の大きな特徴である。言い換えると、社会の多くの文化的な活動が歴史化しているとも言うことができよう。

ところで、政治家は、歴史を演説に引用し、歴史家が生み出した歴史をこれまで巧みに利用してきた。それに対して、歴史戦争では、政治家やシンクタンク、ジャーナリストなどが、党派にとって必要な歴史のあり方をあらかじめ決定し、ナショナル・ヒストリーのあり方を歴史家や歴史研究に押し付けようとしたところに大きな特徴がある。さらにそれは、ナショナル・ヒストリーの必修科目化へと突き進んだ。歴史は、社会の広い範囲へと分散しただけではなく、政治家がプロの歴史家と歴史学が担ってきた歴史の内容にも、強い影響を及ぼすようになってきたのである。⁽⁹⁾ しかも、情報技術や多様なメディアの発達は、こうした方向を推進する手段を提供した。また、多数のアマチュアの歴史家が生み出す歴史や一般市民の経験を、双方向的なメディアによって利用することが可能になっただけでなく、歴史が社会化した状況では、そうしなければ、歴史家や歴史学が社会的に広く受け入れられる知の生産者としての正当性を保持することも難しくなってきた。

3 歴史博物館

前節では歴史の社会化の五つの特徴を列挙したが、これらは相互に関連しながら、オーストラリアにおける広い意味での歴史的総体を構成し、新しいナショナリズムやナショナル・アイデンティティと構造的な連関を有している。本稿が対象とするのは、そのうちの「II 地域の

(8) Burgess, Jean, Helen Klæbe and Kelly McWilliam, “Mediatization and Institutions of Public Memory: Digital Storytelling and the Apology”, *Australian Historical Studies*, Vol.41(2), 2010, pp. 149-165 を参照。

(9) Macintyre and Clark, *op. cit.*, p. 5 を参照。ただし、こうした政治による歴史への介入は、自由党のハワード政権の独占物であったわけではなく、それに先立つ労働党のキーティング政権にも同様の特徴がすでに見られる。

歴史化」であり、とりわけ地方の歴史博物館に焦点を合わせる。

博物館における歴史的展示については、歴史戦争の戦場の一つとなったキャンベラの国立博物館に、強い関心が寄せられてきた。とりわけ先住民の歴史と初期入植の説明については、保守派の厳格な監視とそれへの反発が世論の関心を引き付けた。しかし、地方に多数存在する歴史博物館の展示には、世論はほとんど関心を示すことはなかった。他方で、歴史家たちは、近年、博物館の歴史的展示を研究対象として真剣に検討するようになってきている。しかしながら、その内容は、大都市圏にある博物館の新しい活動を肯定的に紹介する傾向が強く、歴史をめぐる社会の変動との関連を探る観点はきわめて希薄だと言わざるをえない⁽¹⁰⁾。本稿では、地方の歴史博物館を検証することで、地域の歴史化と新しいナショナリズムやナショナル・アイデンティティとの関連を探りたいと考えている⁽¹¹⁾。

研究の対象としてはクィーンズランドの一群の歴史博物館を選んだ。本稿における歴史博物館の意味は、オーストラリアの人間の歴史を主な展示対象とする施設である。この地域を選択した主な理由は、①ストックマンズ・ホール・オヴ・フェイムやオーストラリアン・ワーカーズ・ヘリテージ・センターなど、地方の歴史博物館としては大規模なものが多い。②先住民や中国人の博物館、フライング・ドクター・サーヴィスやウォルシング・マティルダ⁽¹²⁾の博物館など、多様な博物館が見られる。③今回調査した博物館の多くは、ここ10年くらいの間に訪問したことがあり、変化の様子がある程度わかる。④クィーンズランドは、排外主義的なワンネイション党がかつて最大の勢力を誇るなど、保守勢力の影響力が強く、歴史戦争の結果として展示に変化があるとすれば、もっとも明白に見られる地域だと予想できる、という4点である。

歴史博物館を調査した時期は、2010年8月。調査対象とした博物館は表1の通りである。調査の旅程は、ケアンズから海岸沿いにタウンズヴィル、そこから西に向かい、チャータズ・タウアズを経て、さらに西のクロンカリーに到着した。そこから南東に向かい、ウィントン、ロングリーチに至る。ロングリーチから南回帰線に沿うように東に向かいバーコールドンを経由、東岸に近いロックハンプトンに出た。そこから南東に進み、最後の調査地、ハーヴィー・ベイに入った。途中、宿泊できるモーター（自動車の止められるホテル）を探して、50キロほど経路を逸れたこともあったが、だいたいはこの経路上を移動した。この経路上には、他にも歴史博物館と呼べるものが複数あったが、時間の関係もあり調査対象から外した。その他にも、エメラルドの町にある巨大なゴツホのひまわりの絵に至る道に埋め込まれた歴史プレート

(10) Schamberger, Karen, “Still Children of the Dragon? A review of three Chinese Australian heritage museums in Victoria”, *Australian Historical Studies*, Vol.42(1), 2011, pp. 140-147; Burgess et al., op. cit.; Message, Kylie, “The Museum of Australian Democracy: A House for the People?”, *Australian Historical Studies*, Vol.41(3), 2010, pp. 385-395; Phillips, M.G., “A Historian in the Museum: Story Spaces and Australia’s Sporting Past”, *Australian Historical Studies*, Vol.41(3), 2010, pp. 396-408 を参照。

(11) オーストラリアの地方の博物館の状況に関しては、Griffin, Des and Leo Paroissien (eds.), “Regional Museums”, *Australian Museums and Museology*, Understanding Museums, National Museum of Australia (Internet, 4 Sep 2012, http://www.nma.gov.au/research/understanding-museums/Regional_museums.html) を参照。

(12) オーストラリアに関連する用語については、大阪大学文学部西洋史研究室のサイトにあるオーストラリア辞典 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/dict/index.html#dict> (変更される可能性あり) を参照。

や、ロックハンプトンの入り口の歴史的建物村など、いずれもツーリスト・ビューロー（観光案内所）に隣接している、興味深い施設もあったが、本稿では検討の対象とはしていない。

表1 調査した歴史博物館の一覧

館名	本稿での略称	位置	展示内容
The Mareeba Heritage Museum	マリーバ博物館	マリーバ、ケアンズ近郊	地域史
Atherton Chinatown, Hou Wans Miao	チャイナタウン博物館	アサトン、ケアンズ近郊	中国人コミュニティの歴史
Charters Towers Folk Museum	チャータズ・タウアズ博物館	チャータズ・タウアズ	地域史
John Flynn Place	航空医療博物館	クロンカリー	フライング・ドクター・サービスの歴史
Waltzing Matilda Centre	マティルダ・センター	ウイントン	ウォルシング・マティルダ関連および農牧業など
Australian Stockman's Hall of Fame	ストックマンズ・ホール	ロングリーチ	植民や開拓の歴史と牧畜業およびアウトバックの生活
Australian Workers Heritage Centre	ワーカーズ・センター	バーコールドン	労働運動の歴史と労働者の生活
Dreamtime Cultural Centre	ドリームタイム・センター	ロックハンプトン	先住民の歴史と文化
Hervey Bay Historical Village and Museum	ハーヴィー・ベイ歴史村	ハーヴィー・ベイ	地域史

4 歴史博物館の検証

表1に示した歴史博物館を四つのグループに分けて、検証したいと思う。⁽¹³⁾第1のグループは、オーストラリアの広い地域で見られる。地域の歴史を対象とする、マリーバ、チャータズ・タウア、ハーヴィー・ベイの博物館。第2のグループは、特定の民族を対象とする、アサトンとロックハンプトンの博物館。第3のグループは、単一の対象に特化した、クロンカリーとウイントンの博物館。第4のグループは、農牧業を中心とする開拓や労働者という大きなテーマを掲げた博物館。以上の4グループを順に検討していく。

(1) 地方史の博物館

地方の歴史、ローカルな歴史を主な対象とする施設は、屋外のスペースを考慮に入れなければ、小さなものが多い。ここでは、マリーバ博物館、チャータズ・タウアズ博物館、ハーヴィー・ベイ歴史村の三つを順に検証する。

マリーバ博物館は、地域住民のイニシアティブによって、州政府や地方自治体からの援助や寄付金によって、1995年に開設された。観光案内所が併設されており、地域の歴史の紹介と観光の振興を目的にしている。町の人口は約7000人。主な産業は農業であるが、ケアンズから車で1時間程度のところにあるので、農産物を元にした観光の振興も図っている。

展示内容は、典型的な地方の博物館の一つと言ってよいだろう。ヘリテージ・ウォークと書かれた門をくぐると、先住民の生活や白人開拓者の生活を再現した展示、第1次世界大戦の展

(13) 各博物館に関する情報は、撮影した展示物やパネルの写真、各種パンフレット、ホームページ、館員からの聞き取りなどに基づく。各施設のホームページの参照時期は、2012年7-9月である。

示、そこにはお決まりの Roll of Honor と呼ばれる戦死者のリストが銅板に刻まれて置かれている。続いてあるのは、この地域の入植者、アサトン高地の名称の元になった、ジョン・アサトンの展示であり、さらに入植初期の経済発展に貢献したスズ鉱山の展示などがある。ここまではきわめて大まかだが時代順に展示が並べられている。これに続くのは、かつての学校の再現、新聞の輪転機などの雑多な展示、屋外に出て、救急列車や農業機械・器具、拷問道具、古い下着、鍛冶屋の道具、トイレや商店の再現（外観だけ）などの脈絡のない展示が続く。入場料は無料で、今回は2度目の訪問であったが、展示内容に大きな変化はなかったように思う。

先住民と開拓者、兵士たちの歴史などを取り上げるのは、近年開設された博物館によく見られる傾向であろう。ただし、後半に紹介した、ガラクタ置場のような雑多な展示物は、古典的な地方の博物館の特徴を示している。

チャータズ・タウアズ博物館は、この地域で活躍した女性ザラ・クラークの努力と地域住民のイニシアティブによって、1979年に設立され、現在ナショナル・トラストが建物を所有し、博物館を運営している。チャータズ・タウアズの町は、1870年代に金鉱の町として勃興し、クィーンズランドではブリスベンに次ぐ都市に成長したが、1920年までには、ほぼ金の産出はなくなり、じょじょに衰退の道をたどった。現在人口は約8000人にすぎないが、地域経済の中心地である。周辺の農牧業へのサービス提供、近年復活した金鉱業、教育などが主要な産業であるが、ゴールドラッシュがもたらした美しい街並みと文化遺産を利用して、観光にも力を入れている。

博物館の展示内容は、マリーバ博物館よりいっそう古典的な地方の博物館の典型と言えるだろう。時代順などはまったく考慮もせずに、さまざま展示物がいくつかにカテゴリーに分けられて雑多に配置されている。入り口には、お決まりの戦没者リストと全くまとまりのない展示物が重なるように置いてある。順に回ると、昔の病院、フライング・ドクターや無線による学校の設備、消防車、ミルクカート、台所・家庭用品、ミシン、電話交換機、古い電話がある。さらにピアノやレコードプレイヤー、ヴァイオリンやオルガンなどのコレクションはかなりのボリュームである。金鉱関係の展示、タイプライターやレジスターなどのオフィス機器、古い家の部屋の再現、地域の著名人に関する展示があり、さらに学校と子供の生活の展示は興味深い。農業機器や金の計量などに使う道具、さまざまなカメラと地域の人びとの集合写真もある。最後に、建物の7分の2くらいの場所を占めて、地域の戦争の英雄の写真、多数の Rolls of Honor、軍服や鉄兜、飛行機の模型や写真、ヨーロッパでの部隊の配置の模型、弾薬や剣などの装備、多数の勲章などが配置されている。他にはクラシックカーなども展示されているが、どういう脈絡でその場所にあるのかは不明である。

軍事関係の展示の占める割合の大きさ。中国人鉱夫に関する資料はあるが、先住民の展示がまったくないのはこの博物館の特徴である。この施設は、専任のスタッフとボランティアが運営しており、地域住民の伝統的なアイデンティティを素直に表現しているところに特徴があると思われる。入場料は大人5ドルで、低額だと言えよう。

ハーヴィー・ベイ歴史村は、地域住民が一軒の建物を寄付したことから、1974年に設立さ

れた博物館だが、現在では18の建物からなる比較的大きな施設に拡大している。歴史村は、連邦政府や地方自治体の援助を受けることもあったが、基本的に地域住民の金銭、労力、モノの寄付によって運営されている施設であり、開館しているのは、金曜と土曜の午後と休日に限られている。ハーヴィー・ベイは、人口約5万人、海外沿いに長く連なる保養地、観光都市である。また、多数の定年退職者が暮らす街でもある。施設は、退職者のボランティア労働によって支えられている。

展示の内容は、一般的な地方の博物館とだいたい同じである。列举してみると、農業器具や機器、各種の工具、かつての家庭生活の展示、ラジオや蓄音機、ミシン、ピアノなどの楽器、かつての学校や駅舎の再現、砂糖生産に関する展示、馬車や馬具、森林開発の展示、消防車、クラシックカー、ガソリンの給油機、古い銃、先住民の道具、カヌーや石器など、海や海難の歴史の展示、多数の貝、衣類、生活調度品、寝室、各種の皿のコレクション、町の歴史を示す写真と多くの集合写真、タイプライター、多数の本、プレート類、医療器具、コイン、電話、時計、アイロンなど。重複しているところもあるが、見学順に撮影した写真を見て、展示物を抜粋しながら記載すると上ようになる。展示物が雑多なものの「ごった煮」のような感じであるのは、他の地方の博物館と同じである。

ハーヴィー・ベイ歴史村が他の地方の博物館と異なり、極めて優れているところが2点ある。それが、歴史村が優秀な博物館として繰り返し表彰を受けている理由だと思われる。一つ目の優れた点は、歴史村が19世紀から20世紀初めに建てられた建築物を施設内に移築し、ボランティアの労力で修復し、建物が使われていた様子を生き生きと再現しようと試みている点である。例えば、開拓時代の生活を再現した小屋、そこにはベッドやテーブル、その他生活用具だけでなく、ウサギ狩りに使われた罠のような道具も備えられている。駅舎は、クィーンズラン



写真1 ボランティアの女性たち、植民地時代の衣装を身につけて協力している。

ド州立鉄道から買い取ったもので、郵便局としても使われた様子が再現されている。また、学校も古い学校の様子を内部で再現してある。二つ目の優れた点、これが最も特徴的な点だが、ボランティアの人びとが、主に植民地時代から20世紀前半にかけての作業を再現し、訪問者と会話を交えながら、体験もさせてくれる双方向的な活動である。大きな博物館がデジタル機器やITを用いて、双方向的歴史展示を目指しているのとは対照的に、きわめてローテクではあるが、説明にはユーモアがあり、入場者の反応も上々で、博物館の人気に貢献していると思われる。写真1は植民地時代の衣装を身に着けて、パフォーマンスに協力しているボランティアの女性たち、写真2は観客がロープ作りに挑戦している場面である⁽¹⁴⁾。このほか、鍛冶屋やトウモロコシの皮むきと実落とし、材木の切断やさまざまなことを、実演できるボランティアがいる範囲で見せてくれる。

地域の住民がボランティアで運営している施設としては、優れた施設だと言することができる。また、運営に参加している人びとの誇りが感じられる博物館でもあった。この施設は、単に雑多な地域のアイデンティティを表現する博物館であるにとどまらず、多数のボランティアの参加によって、地域的な結びつきの一つの核となっている。入場料は、大人7ドル、学生2ドル、小学生1ドル、形ばかりの課金だと言える。

地方の歴史を主な対象とする博物館の展示内容と展示の仕方は、こうした博物館に典型的に見られる形、つまり地域の歴史の雑多でまとまりのない内容を、一応のカテゴリーはあるが、カテゴリー間の脈絡なく展示するというものであった。設立年の新しいマリーバ博物館や、連邦政府の援助などもあり近年拡大しているハーヴィー・ベイ歴史村では、先住民関係の展示が見られたが、チャータズ・タウアズ博物館にはそれがなかった。この点では、連邦レベルの政



写真2 観客が指示に従ってロープ作りに挑戦。

(14) 以下、写真はすべて著者の撮影。

治的变化の影響を受けているとは思われるが、その脈絡のなさは、歴史戦争で噴出した歴史観の対立とこれらの博物館における展示内容がおおよそ無関係なことを示している。チャータズ・タウアズ博物館の軍事に偏った保守的な展示内容も、地域の伝統に根ざしたものと言えるだろう。

(2) 特定の民族を対象とする博物館

このグループの博物館としては、中国人の歴史博物館であるチャイナタウン博物館と先住民文化を紹介する施設であるドリームタイム・センターを取り上げる。後者が歴史博物館かどうかについては疑義があると思われるが、先住民にとっての伝統的先住民文化の紹介は、当然歴史の一部として含まれると考えて、ここに加えた。いずれも多文化主義が生み出した施設であり、その検討は、多文化主義の実態の検証にもなるだろう。

チャイナタウン博物館は、人口約7000人の町、アサトンの町はずれにかつてあったチャイナタウンの跡地に残った侯王古廟を修復した建物と、関連施設からなる施設である。20世紀初頭にチャイナタウンとその周辺に住む中国人の数は、1000人を超えるほどであった。しかし、その後、白豪主義の影響もあり、じょじょに没落し、第2次世界大戦後には朽ちかけていた侯王古廟を残すだけとなった。この地をある中国人家族が買い取り、1980年にナショナル・トラストに寄贈したのが、この施設の始まりである。1995年には協力するボランティア・グループが結成され、2000年にはクィーンズランド政府から130万ドルの補助金を得て、本格的な整備が行われ、侯王古廟の修復は2002年に終わった。また、1984年には旧アサトン郵便局が移設され、現在は侯王古廟の背景を説明する施設として利用されている。

アサトンはマリーバよりも、ケアンズから車でさらに30分ほど離れたところにあり、主な産業は農業である。町としては、旧チャイナタウンを利用して、観光の振興を図ろうとしているが、あまりうまくはっていないようである。

展示の内容であるが、旧郵便局の建物にパネル展示があり、侯王古廟の歴史的变化の説明と地域の中国人コミュニティの歴史の説明が行われている。金を求めてきた移民の説明から、林業や農業に従事した時代の説明、厳しい人種関係などが手短かに語られている。さらに少しばかりの遺物の展示もあるが、きわめて限られている。侯王古廟自体は、きれいに修復されており、当時の信仰の場や、壁に描かれた絵画などを見ることができる。また、ここがコミュニティの集いの場であったことに関するガイドによる説明もあるが、貧弱な施設だという感想は避けがたい。

入場料は大人10ドル、子供5ドル、展示が貧弱なわりには地方史の博物館よりも値段は高い。ここを訪れるのは2回目であるが、いずれの場合も他に入場者はなかった。こうした状況を改善しようとしてか、鷹を使ったショーやチャイナタウンとは無関係なショップを作って、集客を図ろうとしている。

ドリームタイム・センターは、人口約75000人の町、ロックハンプトンの北側の町はずれに位置する。12ヘクタールの敷地を持ち、オーストラリア最大のアボリジナル文化センターと称している。先住民ダランバル Darambal や他の先住民の文化を紹介する施設であるのみなら

ず、コンベンション・センターやモーターも備えており、経済的な自立と先住民の文化の結節点であることも目指した施設である。土地はロックハンプトン市が提供し、施設は連邦政府の資金によって建てられた。1988年4月、一部の展示施設が労働党のホーク首相の臨席の下でオープンし、同年11月にはトレス海峡諸島民の施設、92年にはジュゴン・コンプレックスが加わった。前述のコンベンション・センターは94年に、モーターは2000年にオープンしている。このモーターは、比較的安価で市内に行くのも便利なので、私自身3度ほど利用している。

ロックハンプトンの町は、中部クィーンズランド最大の都市で、牧牛業などの農牧業や鉱山業などへのサービス・センター、教育や文化、政治の中心としても栄えている。また、観光も重要な産業で、かつて日本資本によって開発されたリゾートが、町から車で30分ほどの海岸にあるヤプーンの町にある。観光案内所が、フィッツロイ川沿いに並ぶ旧建築群の一つ旧関税局の建物に設けられており、観光の振興に力を入れていることがよくわかる。

続いてドリームタイム・センターの展示の内容の説明に移る。最初に入ったトレス諸島民コンプレックスは、エディ・マボウやトレス諸島の生活の写真といくばくか民芸品がある、写真3のような、がらんとした倉庫のような感じの建物であった。その次のジュゴンの形をしたジュゴン・コンプレックスは閉鎖されていた。

その次に向かったのは、最大のアトラクションである建物の内部に再現された30メートル強の砂岩の洞窟である。ここではガイドが説明してくれた。展示は、探検家であり植民地官僚でもあったエドワード・ジョン・エアの、先住民を追い払い、私たちは先住民が持っていたすべてのものと自由を奪い取り、その代わりに先住民には、悪名と軽蔑と墮落を与えたという旅行記の引用から始まる。これは一般の博物館ではあまり見られない描写で、印象に残っている。それに続くのは、オーストラリアを代表する考古学者ジョン・マルヴェイニによるケニフ洞窟の発掘の成果とその意義の説明、キング・プレートを首にかけた先住民3人の写真、牧場



写真3 トレス諸島民コンプレックスの内部。

の先住民の生活写真4枚、洞窟の壁画と地域にある奇岩の模型、侵略と題する内陸探検の地図5枚（写真4参照）、ゲーリ・ゲーリ鳥と呼ばれる伝説の巨鳥に関する物語の機器を使った説明、先住民のステンシル画の作り方の説明である。最後にメイン・ビルディングには、先住民のスポーツ選手たちの展示と先住民絵画、先住民の伝統的な道具や石器の展示があるが、大規模なものではない。

入館料は、大人13.5ドル、高校生以下6.5ドルであり、高価ではないが、内容からすると安いとも言えないと思われる。当日の入館者はほとんどいなかった。付属のモーターは、最初に滞在した時は質の高い宿泊施設だと思ったが、今回は、椅子が壊れていたり、カーテンが汚れていたり、せっかくの設備が十分に活かされているとは思えなかった。従業員も親切だとは言えなかった。実際、経営はあまりうまくいっていないようで、将来的に政府への財政的依存を縮小するために、この施設の目と鼻の先にある、ハーヴィー・ベイの施設に類似した開拓者村との協力関係の構築を模索している。また、先住民のスキルの訓練施設を併設することも目標としている。

チャイナタウン博物館とドリームタイム・センターは、多文化主義とともに発展した歴史博物館であるが、いずれも広く一般の訪問者を集めるのに苦労しており、見学施設として成功しているとは言い難いのが現状である。その対策として、チャイナタウン博物館の場合には、鷹のショーやショップの誘致、ドリームタイム・センターの場合には歴史村との連携と、いずれも特定の民族集団に特化した施設という性格を稀釈する方向を目指している。

(3) 単一のテーマに特化した博物館

このグループの博物館としては、フライング・ドクター・サービスの誕生と発展を扱ったクロンカリーの航空医療博物館、つまりジョン・フリン・プレイスト、オーストラリアの第2



写真4 侵略と題された探検の地図。

の国歌とも呼ばれるウォルシング・マティルダをテーマとした、ウィントンのマティルダ・センターを取り上げる。

航空医療博物館は、人口約 2000 人強の町、クロンカリーにある。クロンカリーは、マウント・アイザの東、約 100 キロに位置する特徴のない町であるが、近年は銅鉱山の開発で活況を見せ始めている。航空医療が 1928 年にこの地で始まったことを理由に、入植 200 年記念事業の一環として、1988 年に航空医療博物館がここに設置された。2000 年には、フリンの生誕 120 周年を記念して、クィーンズランド政府の援助を受けて、新しい展示品が加えられた。施設を収容しているのは、3 層に分かれている建物だが、規模は大きくなく、しかも最上層にはアートギャラリーも併設されている。入館料は大人 9 ドル、子供 5 ドルと比較的安価で、町のほぼ唯一の観光資源ということもあってか、かなり多くの入館者がいた。航空医療はオーストラリアが独自に開発した制度であり、誰もが知るオーストラリアの歴史的シンボルの一つだということも、訪問者が多い理由の一つだと思われる。施設は、現在クロンカリーの自治体が管理運営しているが、設立のための資金集めには、地域を中心とするボランティア団体の貢献も大きく、現在もその関与は続いている。

展示の内容としては、航空医療の創設者であるジョン・フリンとその仲間に関するパネル、創設に当たったのカンタス航空との協力、フリンが属したインランド・ミッションの説明、航空医療に使われた飛行機の模型、さまざまな機械や器具、航空医療展開の背景となる、開拓の歴史、かつてのオーストラリア内陸部、アウトバックの生活の説明、とりわけ無線通信学校の紹介などを、主なものとしてあげることができる。

アウトバックを対象とする博物館ということを見ると、先住民との関係をどのように扱っているかは気になるところだ。フリンが属し、航空医療の母体になったインランド・ミッションが、クィーンズランドから西オーストラリアに広がる、オーストラリアの広大な内陸部で活動していたにもかかわらず、その対象が主にヨーロッパ系の入植者に限られていたこともあり、アボリジナルの人びとは、フリンたちを見ている傍観者か、患者として現れるだけであった。先住民との関係は博物館の関心の域外にあると言ってよい。ただし、フリンが先住民の窮状に目を向けていたことを示す文書と、航空医療がすべてのオーストラリア人のものであったとする主張は書かれているが、かなりあからさまな自己正当化のための展示に見える(写真 5 参照)。

マティルダ・センターは、クィーンズランドのほぼ中央部、牧畜地域にある人口約 1000 人の町、ウィントンに位置する。ウォルシング・マティルダは、スコットランド民謡に、バンジョー・パターソンが詩をつけた曲で、19 世紀末にウィントンで初めて披露されたとされている。この由来を元にして、マティルダ・センターは、州政府や地域住民の協力によって 1998 年に自治体によって設立され、現在も事実上、自治体が管理運営する施設である。入館料は大人 21 ドル、子供は半額と、かなり高いが、多くの見学者が訪れていた。今回が 2 回目の訪問であったが、状況に変化はなかった。併設されている食堂もほぼ満員で、みやげものコーナーも賑わっていた。

入館者の目的がウォルシング・マティルダにあるにしても、一つの歌のために作られた世界



写真5 先住民に関する展示写真の1枚。

で唯一の施設というキャッチフレーズは正しくはない。実際は複合施設である。アートギャラリー、カンティルダと呼ばれる地域の博物館、芸術作品などの特別展示室などが併設されている。とりわけ、カンティルダは、1970年に設立された地域の歴史協会が1972年オープンした、地域の歴史博物館を包含した展示場である。包含とは表現したが、実は施設の面積の半分以上をカンティルダが占めている。カンティルダは、典型的な地域の博物館の様相を呈しており、機関車や駅舎、農業機械、衣類、靴、ビン、銃、レジスター、カメラ、タイプライターなど、さらに先住民の道具や写真などが、脈絡もなく展示されている。何らかの主張が見られるのは、ウintonの牧畜業の発展と戦争への参加を誇らしく展示しているところで、これも地域の博物館に一般的に見られる特徴である。

この施設の主要部は、ウォルシング・マティルダの内容を、ホログラムを使った劇として見せる劇場で、上演時間は12分である。これに加えて、パターソンの人生と歌が誕生した歴史的背景、ウォルシング・マティルダが国民的な歌となる経緯、さまざま歌のバージョンを、パネルや音声によって説明している。

航空医療博物館とマティルダ・センターは、小さな町の観光の目玉として、成功を収めていると言えよう。しかも、それぞれの地域がオーストラリアのアイデンティティ形成に果たした重大な役割を強調することで、地域の誇りと地域的アイデンティティの核ともなっている。

(4) 大きなテーマを掲げた博物館

このグループの博物館としては、農牧業の発展をテーマとする博物館、ロングリーチにあるストックマンズ・ホール・オヴ・フェイムと、オーストラリアの労働者の歴史をテーマとした、バーコールドンのオーストラリアン・ワーカーズ・ヘリテージ・センターを対象とする。この二つの施設は、展示スペースを見ると、いずれも他の施設よりも大規模で、本格的な歴史博物

館である。

ストックマンズ・ホールは、人口約 3000 人、南回帰線上にある地域のサービス・センター、ロングリーチの町にある。この博物館は、長期にわたる募金活動の後に、連邦政府とクィーンズランド州政府の補助を受けて、1988 年に開館した。大人の入館料が 29.5 ドル、子供が 15 ドルと高額であるにもかかわらず、来館者はすでにのべ 100 万人を超え、大きな成功を収めている。同館の運営は非営利の有限会社組織が独立して行っており、政府や自治体からの恒常的な援助は一切受けていない。しかし、運営に関わる収支は黒字であるが、博物館としての大成功にもかかわらず、減価償却などの費用を含めると赤字となっている。そうは言っても、博物館から 300 キロ圏内に人口 1 万人を超える都市のない施設としては、驚くべき成果を収めていると評価できる。

建物自体が非常に奇抜なもので、しかも入り口では、シープドッグにより羊の群れを集めるショーを行うなど、娯楽性にも配慮がなされており、遠隔地にもかかわらず多くの入館者があることは理解できる。展示内容は、大きく五つに分かれている。第 1 展示室は、発見をテーマに、古代の大陸の様子と先住民、探検と初期の入植活動などについて、特にクィーンズランドに重点を置いてパネルを中心にした展示を行っている。第 2 展示室は、開拓者と題して、さまざまな職業の入植者を、パネルを使って個人単位で説明すると同時に、職業に使われた荷馬車や機械・器具などの実物の展示を行っている。見学する子供用の引出しも用意されている。第 3 展示室は、アウトバックの牧場と題して、牧場における活動と生活を、パネルを用いて多面的に紹介している。アボリジナルの牧童や掘り抜き井戸など、対象は多方面に及んでいる。実物の台所、体験できる電話、ウサギを捕まえる罟、さまざまな道具や本などの展示も充実している。さらに、大牧場主や入植者たちが個人としてパネルで取り上げられている。第 4 展示室は、アウトバックの生活と題して、航空医療、無線学校、農業フェアなどの娯楽、女性開拓者、アウトバックに特殊な技術、サーカス、ボクシングなどを、パネルと実物で紹介している。最後の第 5 展示室は、牧童と図書館と題して、パネル、写真、実物の展示などで、牧童たちの仕事の様子を紹介している。この他、タッチパネル式のフィルムや新たに導入された映画など、入館者を飽きさせないような工夫もなされている。

ストックマンズ・ホールの大きな特徴は、1 枚のパネルを個人に割り当てることで、その業績を顕彰しようとしているところにある。この点は、その他の歴史博物館にあまり見られない特徴である。先住民アボリジナルに関しても、その存在を無視しているわけではなく、ガイドや牧場労働者としての活躍を指摘している。しかし、その量は少なく、描き方も、開拓の歴史に付随するものとして扱われているにすぎない⁽¹⁵⁾ように見える。

ワーカーズ・センターは、ロングリーチの東約 100 キロ、人口約 1500 人の町、バーコールドンにある。バーコールドンには、1891 年の大規模な羊毛刈り職人のストライキを記念する「知

(15) Smith, Laurajane, "A Pilgrimage of Masculinity: The Stockman's Hall of Fame and Outback Heritage Centre", *Australian Historical Studies*, Vol.43(3), 2012, pp. 472-482 は、先住民や女性に関する展示が増加した背景を説明している。また、来館者の反応を調査している。



写真6 スtockマンズ・ホール・オヴ・フェイムの正面入り口。

識の木」のモニュメントが存在し、この地で、オーストラリアで最初の労働党が創設されたと主張されている。小さな町ではあるが、オーストラリアの労働運動にとっては重要な町である。ワーカーズ・センターは、1991年に設立され、政府や自治体からの恒常的な援助を受けずに運営されている施設である。入館料は、大人16ドル、子供9ドルと、安くはなく、2回訪問しているが、いずれの折にも入館者はあまりいなかった。年間入館者は約2万人である。収益の向上が喫緊の課題となっているようで、政府から女性労働者の展示の拡張のために170万ドルの援助を受けたり、集客のために「世界初の山羊博物館」の設立を提案して、新たな援助を受けようとしていたりしている。また、アウトバック教育センターを併設して、中高生の短期的な教育の場としての活用も図っている。こうした問題はあるにしても、この町の経済にとってはきわめて重要な施設であることは間違いない。

展示内容の検討に移ろう。センターには池のある広い中庭があって、その周囲に多数の展示施設が配置されている。コースに従い紹介すると、最初に、移築された鉄道の駅と客車、その中に鉄道労働者と鉄道の歴史の展示があり、次に警察と関連施設、犯罪者の展示が続く。テントと呼ばれる大型展示室には、1891年のストライキと先住民労働者の詳細な展示がある。労働党と労働運動の展示室を経て、郵便と学校に関する施設と教師や郵便や電信に関連する労働者も含む展示がある。さらに、電力事業、病院、宝くじ事業、農業開発、選挙などの展示室、広い意味での女性労働者に関連する展示室、道路建設に関連する展示室、消防車や救急車などを含む消防と救急に関する展示がある。

女性に関連する展示の多さは特徴的であり、また、先住民に関する独立した展示だけでなく、「盗まれた世代」を含むオーストラリア連邦成立以後の、暗い先住民史も避けていないところも顕著な特徴である。展示物や内容は充実しているが、入館者へのプレゼンテーションの仕方は、かなり稚拙で、ストックマンズ・ホールには大きく後れを取っている。他の同種の施設と

同じく、ワーカーズ・センターも、地域の集会場などの機能も併せ持っており、コミュニティの核になっている。

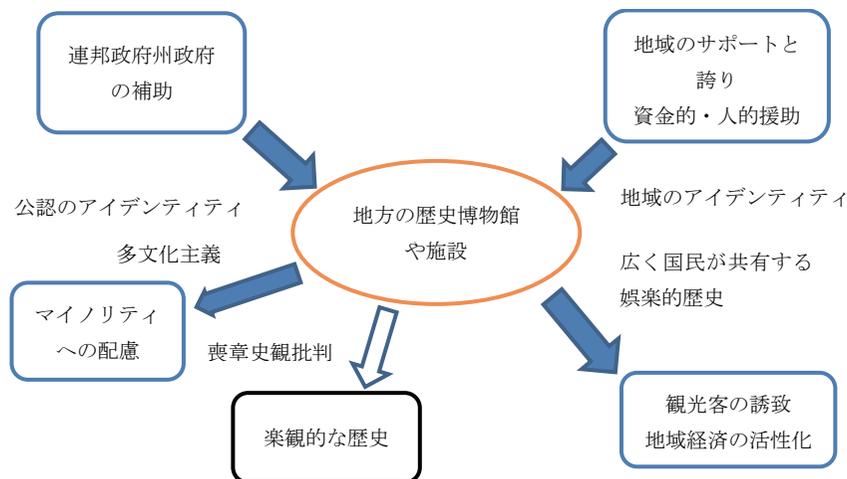
二つの施設ともに、私にとっては再度の訪問であったが、展示内容に大きな変化は見られなかった。両施設とも、地域経済にとっては重要な役割を果たしているが、経営的に自立することは困難なようである。とりわけ、ワーカーズ・センターは新しい方向を懸命に模索している。

5 結論

地方の歴史博物館と、地方の歴史化と新しいナショナリズムやナショナル・アイデンティティとの関連を検証することで、本稿を締めくくりたい。チャータズ・タウアズ博物館とハーヴィー・ベイ歴史村の創設年が、1979年と1974年であることを除けば、他の歴史博物館の創設や本格稼働は、1988年以降であり、グローバル化が本格化するのと、ナショナリズムが強まり、歴史意識の再編が起こった時期と、これらの地方の博物館が誕生した時代は基本的に一致している。

展示内容に影響を与える要因としては、図1に示したような要素を考えることができる。地方の歴史博物館は、これまで見てきたように、その設立に必要な資金や魅力的な展示の新設の資金を、政府の援助に頼る傾向が強く、政府が支援するような国家のアイデンティティを表現する必要に迫られたと想定できる。多文化主義の影響を受けた第2のグループや、ワーカーズ・センターには、こうした傾向が見られる。しかし、プレインやハワードの喪章史観批判が、他の博物館の展示に直接の影響を与えたようには思われない。党派的な歴史観とはあまり関係なく、地方のコミュニティが、入植200年記念（1988年）や連邦結成100年記念（2001年）を契機とする、連邦・州政府の歴史振興策に、地域振興を視野に積極的に応じたと解釈すべき

図1 地方の歴史博物館の展示内容を定める要因



だろう。

言うまでもないことだが、これらの博物館の運営維持には、地域の住民の支援が不可欠であり、地域の住民の自己認識も、博物館の展示運営に大きな影響を及ぼしている。第1のグループは当然として、他のグループでも、地域のコミュニティとの密接なつながりが、博物館の維持には必要であり、旧来型の雑多な展示方法やアートギャラリーとしての機能が、ほとんどの博物館に取り入れられている。

最後に、しかし、歴史博物館の運営に最も大きな影響を与える要因としては、入館者を増やすことで、博物館の経営状況を改善し、観光客の誘致によって地域経済を活性化させる必要性があげられる。鉱山業の活況とは裏腹に、地方経済が低迷する状況で、歴史博物館に寄せられる期待は大きく、入館者の希望を満たすような展示や娯楽の開発へと、歴史博物館を向かわせている。特定の民族を対象とする第2のグループ、アサトンとロックハンプトンの博物館は、展示対象や機能を拡大して、幅広い入館者を集めようとしている。ワーカーズ・センターも同様である。歴史戦争というよりも、経済的な要因が、政府の公認のアイデンティティを色濃く反映した博物館の性格を変えつつあるのである。ナショナリズムの高揚と、そこに生まれるビジネス機会の増大、それを利用しようとする地域のコミュニティと歴史博物館という構図が、地方の博物館のあり方を決める大きな要因として今後も作用し続けるであろう。

*本研究は JSPC 科研費 23510312 の助成を受けたものです。